



比較を使うのは何のため？

筆者が比較をするのは、読者にとって複雑なものをわかりやすくして理解してもらうため。筆者の思いをくみ取り、自分はどう感じたかを追求すれば授業のあり方は大きく変わる。

何かを比較する場合には何のために比較するのかという目的と、比較するための観点が必要。

- ex) ちんすこうを作っている会社それぞれの製品の違いを比較
 目的…食べる人がどんなちんすこうだと食べやすいか選ぶ
 観点…味、食感、風味の種類など

→比較はあくまで目的のための手段であり、比較することが目的になってはいけない！

子どもたちに求められている力を育てる授業

今回の授業では、文章と文章の「比べ読み・重ね読み」への挑戦◎
 何に気づいてほしいか教師は習ったことを使ってほしいと願うけれど…
 「筆者の工夫を見つけよう」という 指示→活動→理解 の流れでは△
 「筆者が比較をしているのは何のため？」という 見つける→探す→気づく の流れで授業づくりをすると違ったふりかえりになった。
 今回は、ハードルの高い学習課題であったかもしれない。だから違う形の授業をしようとするのではなく、どうやって学級全体が取り組めるかと前向きに考えることが大切。

個→集団→個 の授業展開

一人の時間も大事だが、わからないベースで話し合っ気づくのも◎
 一人指名→発言 いろいろな意見が出てきてさばききれない。
 短冊をはるなど意見を分かち合う方法を考える必要がある。

指導案の記述

「一つの花で戦時中と戦後のあるものについて比べ、戦時中と戦後の違いに気づくことができた。」
 →もう少し学習したことへの記述があるとよい

- ・これまでに行った「比べる」という活動の具体例
- ・国語的な力にどのような課題があるのか
- ・児童にとって得意なことは何か

これまでに行ってきた比較の活動と今回の活動はどんなつながりがあって、どんな違いがあるのか。これらが書かれていると、授業や児童の実態がより伝わりやすい。

「わからないベース」の授業

読み手として文中の比較を見つけていく読み方は、ねらいとしては正しい、が…
 児童にとってスタートのハードルが高くなる。

読み手として文中の比較に気づく読み方
 →筆者はなんでこんな書き方をするんだろう？
 なんのために筆者は比較するのか？
 「よくわからない」から「わかる」ために何が必要かの体験につながる。